こまざわ経済通信

発　行
駒澤大学経済学部
同　窓　会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1－23－1

第９回ホームカミングデーに集まろう

ホームカミングデーは卒業生を母校に迎え、駒澤大学の現状を見ていただき、母校との絆を深め、卒業生、教職員、在校生の親睦と交流を図る企画です。

経済学部同窓会は毎年受付デスクを設置し、懇親会場には「商経学部・経済学部卒業生のコーナー」を設けております。商経学部・経済学部のすべての卒業生に開かれたオープンな集まりです。懐かしい母校に集まり、同窓生との旧交を温めようではありませんか。

オータムフェスティバル（大学祭）も同日開催されます。

日時：平成２４年１１月３日（土・祝）
１０：００　受付開始（記念講堂）
１０：３０　開会式
１０：５０　歓迎マーチングバンド
１１：３０　東ちづる氏講演「心豊かに自分らしく生きる～つながる　よりそう」
１３：３０　学長　石井清純先生講演「北アメリカのＺＥＮ『禅と林檎―スティーブ・ジョブズという生き方』刊行に因んで」
１５：３０　懇親パーティ（大学会館食堂　受付１５：００会費無料）

同窓会費納入及び寄付金の御礼

朝夕の空気に秋の気配を感じるようになりました。暑かった夏の疲れが出るころでございますが、皆様にはお元気にお過ごしのことと存じます。

今年の夏はロンドンでのオリンピック・パラリンピックで日本人選手が大活躍し、大きな感動と元気と勇気をいただきました。一方では昨年起きた東日本大震災で被害を受けた方々への復興支援が遅々と進んでいない現状がございます。また、外交面での尖閣・竹島・北方領土の問題、経済面でも中小企業の景況感の厳しさが続くなど日本丸の行く末が心配されます。

さて、２０１２年３月日発行の第２８号「こまざわ経済通信」送付の折、「経済学部同窓会の火を消さないために」と題して、会費納入と寄付金のお願いを同封いたしました。皆様のご協力・ご理解のおかげで、５月２８日現在、平成２４年度会費３１１名、寄付金７５名で合計約１００万円になりました。ありがとうございました。しかし、事業費等の支出は約２５０万円かかりますので、一層のご協力を節にお願いいたします。

同窓会の活動概要としたしましては、

（１）年２回の会報「こまざわ経済通信」の発行
（２）経済学部の教育支援
（３）卒業式で学業、人物に優れた学生に経済学部同窓会会長賞を授与
（４）経済学部ゼミ対抗ソフトボール（毎年１０月１５日）の支援と参加
（５）経済学部同窓会総会の開催（３年ごとに開催）
（６）ホームカミングデーでの懇親パーティー、の６つございます。

同窓会存続発展のためにも、年間を通じて、会費および寄付金をお受けしています。また、未加入の同窓生の掘り起こしにもご理解ご協力をお願いいたします。お願いばかりで大変恐縮でございますがよろしくお願いいたします。

同窓会としては会員相互の情報共有や親睦のみならず、母校経済学部の発展に微力ながら寄与してまいりたいと考えております。同窓会の意義を今一度思い起こすことをもちまして御礼のご挨拶といたします。

平成２４年８月３１日

経済学部同窓会会長　大場やすのぶ

８月１日にフェイスブックを開設しました。
https://www.facebook.com/Ooba.Yasunobu

研究室訪問シリーズ

駒澤大学経済学部准教授　飯　田　　泰　之

私の専門は、マクロ経済政策、なかでも金融政策に関して統計的に検証し、シミュレーションを行うのが学問上の専門です。数学・統計をたっぷりと使って一国の経済、時に世界の経済を考えるという……まぁあまり日常の生活になじみのない研究生活を送ってきた私が急に経済の、そして生活の現場にかかわるようになったきっかけが震災でした。

震災発生直後から、ネット上の縁でＣＦＷ　（Ｃａｓｈ　ｆｏｒ　Ｗｏｒｋ）キャンペーンに参加し、一般社団法人化まで暫定的に副代表を務めました。Ｃａｓｈ　ｆｏｒ　Ｗｏｒｋとは、単なる物資・資金援助ではないやりがいのある復旧期間を提供する手法です。

具体的には比較的単純な撤去・清掃作業にある程度の賃金を支払うことで、被災者の「復旧に携わる」という実感、「自分が必要とされている」という充足、そしてもちろん収入を提供出来るのです。

ＣＦＷキャンペーンに関連して被災地の方々との交流も増えていく、なかでも震災直後から１年間岩手県沿岸部で炊き出しを続けた復興食堂のみなさまとの縁は、私が通り一遍の取材ではない被災地への関わりを持つ大きなきっかけとなりました。震災の記憶、現地への関心を風化させないための試みとして、全国での出店誘致を行い、私のゼミ生もスタッフとして活躍してくれました。それが縁で個人的に被災地を訪れるゼミ生も多くなり、ゼミ合宿も陸前高田にお邪魔させていただくなど、交流は深まっています。

未曾有の災害である東日本大震災によって表面化した問題一電力・人口減少・地域経済の崩壊はどれも「今後３０年に日本が経験するであろう問題」を先取りしています。その意味で、東日本大震災からの復興は今後の日本の問題に対するテストケースであり、モデルを提示するものだと言うことを忘れてはなりません。朝日新聞と株式会社シノドスが共催し、私が代表を務める復興情報共有サイト復興アリーナでは、これからの東北とこれからの日本について情報発信を行っています。ご興味のある方は是非のぞいてみてください。

復興アリーナＨＰ：ｈｔｔｐ://ｆｕｋｋｏｕ-ａｒｅｎａ.ｊｐ/

名誉教授シリーズ

在職中の思い出

駒澤大学名誉教授　安元　稔

私が前任校の桃山学院大学経済学部から駒澤大学経済学部に移った１９８７年にはまだ第２研究館は建設されておりませんでした。経済学部の先生方の研究室は今の第１研究館１階にありました。間もなく新研究館が完成し、新しい研究室に収まった書籍や資料を前に味わった充実感を忘れることはできません。

在職中にはいろいろなことがありました。特に鮮明に記憶しているのは、受験生の急増、入試倍率の増加と入学者の学力と勉学意欲の向上、箱根駅伝の連続制覇、野球部、サッカー部の健闘をはじめとする学生スポーツの隆盛です。思えば、この四半世紀は駒澤大学の黄金時代といってもよい時代でした。この間、１９９８-９９年、２００５-０６年の両年にイギリスにおける在外研究を許可していただき、研究に集中することができたことは研究者として望外の幸せでした。

退職間際に二つ印象深い経験をしました。一つは、退職直前の２０１１年２月に英文著書（*The Rise of a Victorian Ironopolis, Middlesbrough and Regional Industrialization, Boydell and Brewer*）を出版することができたことです。前年の夏はことのほか暑く、９月末までにイギリスの出版社に完成稿を渡さなければ、２０１１年２月末までに出版することができず、出版助成金を交付していただけなくなるという非常にきついスケジュールの下で執筆しました。研究室の冷房と扇風機をフル回転させ、熱中症に罹ることもなく、２０１０年９月３０日に完成稿を送ることができました。

もう一つ忘れられないのは、退職のわずか２週間ほど前に起きた東日本大震災です。第２研究館４階の研究室で仕事中に、非常に大きな揺れを感じました。直ぐおさまるだろうと思っておりましたが、揺れはますます強くなり、尋常な事態ではないと感じました。退職を控えて研究室の書籍や資料の大部分は既に箱に詰めて、廊下に置いておりました。厚い書籍が本棚から飛んで来て、怪我をするということはありませんでしたが、一階上の経済学部事務室は天井が壊れ、書籍や資料も投げ出され、しばらくは使うことができませんでした。

駒澤公園には既に大勢の駒大生が避難しておりましたが、詳しい情報がまだ届かず、冗談を言い合って、楽観的な雰囲気に包まれておりました。帰宅は困難を極め、同僚の森岡仁先生に車で送っていただきましたが、多摩川にかかる丸子橋を越えたところで渋滞のために先に進むことができなくなりました。徒歩で帰宅したときには午後１０時近くになっておりました。

退職後１年半が過ぎ、ようやく新しい生活スタイルが確立しました。７５歳までに「第１次５か年計画」を達成して６冊目の著書を完成させるべく、精進を続けたいと思っております。

２４年間の駒澤大学経済学部教員としての生活は本当に充実したものでした。在職中にお世話になった同僚の先生方、職員の皆様、学生諸君に深く感謝します。駒澤大学経済学部が研究、教育、社会活動、スポーツ等の面で、今後ますます、発展して行くことを祈念しております。

「駒澤大学OB矢吹会」について

昭和４０年商経学部卒　平　田　　次　広

「矢吹会」の母体は「駒澤大学証券研究会」で１９６３年当時、金融論、国際金融論を担当していた矢吹敏雄教授は研究会の顧問でもあった。数年後の年の暮れに会合が開催され、終了後、教授から提案があった。

それは大学を卒業し社会で活躍されている先輩は大勢いる。また、これから新たに社会に出ていく学生の増加も考えられる。慶應義塾大学（三田会）、明治大学（校友会）、一橋大学（如水会）には同窓会がある。当会を組織化すれば、これからの駒澤大学の大きな財産になる。将来を見据え、同窓会の組織化を図り行動して欲しい、という主旨だった。

この根底に流れるものは、同窓生の拠り所として、相談・協力して支援する体制を構築し、ＯＢ会の機能化を図ることである。教授いわく「人が一人では解決できない困難な事由が生じたときに、経験豊かなＯＢ達と問題解決に向けて、対策、方法など意見交換できる場所があり、問題が解決できた時に、また一回り大きく成長できる。」

第一回「駒澤大学矢吹会」は１９８２年６月に開催した。当時の参加者は「証券研究会」の同窓生が中心となっていた。その後、教授から先輩を紹介され、強力なリーダーのもとに積極的な行動を展開し、大勢の同窓生が参加するようになった。１９８０年代後半には、大学側の理解と参加（総長、学長、元野球部監督）によって年々盛況になり、最盛時には五百名を超すほどになった。お互いに会えばいずれも古き佳き時代の学生に戻る一瞬である。

提案されて四半世紀、教授の先見の明の素晴らしさに今の繁栄がある。今後は若きリーダーの下に継続させていく。

最後にこの会の開催にあたり、幾度となく「講演」を快く引き受けてくださった元野球部太田誠監督に、この場を借りて御礼申し上げます。

（注）矢吹敏雄先生は東京商科大学（現一橋大学）を卒業後、安田銀行（後に富士銀行）に入社し、実業界での活躍を経て昭和３４年経済学部講師に就任し、昭和５４年まで２１年間在職され金融論、国際金融論を担当されました。

（事務局）

ゼ　ミ　紹　介

百　田　ゼ　ミ

私たち百田ゼミは、現在２～４年生６５名で活動しています。研究テーマは、企業の社会的責任（ＣＳＲ）や、企業倫理です。経営学の基礎を学んでから、ゼミ生が決めたテーマに沿って研究していきます。また専門知識だけでなく、社会に通用するコミュニケーション能力を養うため、研究の発表形態などもゼミ生自身が工夫を凝らし、発表後も互いに評価し合います。ゼミでの研究は自主性を基本方針とし、日々高め合っています。

百田ゼミは、何事にも積極的に取り組んでいます。研究ではもちろんのこと、イベントなどにも全て本気です。今年度は経済学部ゼミナール連合会の議長ゼミに選出され、ゼミ連主催のイベントや、１年生を対象としたゼミ合同説明会の運営指揮を担当しています。またゼミ単位でも、自分たちで飲み会やイベントを企画し、やるからには気が済むまでとことん楽しみます。そのようなことができる雰囲気づくりも大事にしています。

「ゼミ活動を通して、生涯付き合える仲間を作ってほしい。」百田先生はこうおっしゃっていました。その言葉はもう、一人ひとりすでに達成できているのではないでしょうか。そう言っても過言ではないほど、他のゼミよりもゼミ生同士や先生との繋がりが強い。それが百田ゼミです。

「２０１２年夏合宿風景」

「４世代合同の追いコン」

松　田　ゼ　ミ

■勉強も本気、遊びも本気で

経済学部の現代企業論のゼミである、松田ゼミナール４年の鈴木佳奈子です。

松田ゼミは、勉強に対して本気です。２年次のゼミでは、まずは経営学の基礎を身に付けることを目的として、１冊の本を各章ごとに担当を分け、各々がレジュメを作成して毎回発表をします。３年次になると、各自が定期購読をしている『日経ビジネス』の記事を題材に、毎週テーマを変えてディベートを行います。また２・３年生は、毎週のゼミと並行して、春休みから夏合宿での発表に向けて、グループ研究を行っています。各班は授業の合間や、夏休みに入ると毎日学校に集まって、お互いに意見をぶつけ合いながら切磋琢磨し、より良い研究報告ができるように必死で研究をします。そして、ゼミのメインイベントである夏合宿で、どの班もこれまでの成果をパワーポイントを使って一生懸命発表し、ハッピーエンドに…、というわけではありません。その研究報告を見た先生や先輩方のご指摘を受け、さらに合宿中にプレゼンテーションを練り直します。夜な夜な皆眠い目をこすりながら研究を進め、指摘があった箇所をどう変更するか案を出し合います。毎年どの班も寝不足になりながら、班によっては全然寝ることが出来なかった班も出てきます。しかし、その極限状態で仕上げたものは、以前のプレゼンテーションよりも格段に成長しています。合宿を終えると、どのゼミ生も皆すごく成長しています。そして夏合宿で仕上がったプレゼンテーションを、さらに日本学生経済ゼミナール主催のインナー大会や他大学との合同勉強会、学内の討論会で発表します。この２・３年生の経験を活かし、４年生では各々卒業論文にいそしみます。

また、松田ゼミは遊びも本気です。②のソフトボール大会の写真を見て分かるように、２～４年のゼミ生ほとんどが参加し、本気で楽しみます。その他にも様々な行事に各学年、ほとんどのゼミ生が参加して楽しみます。様々な行事に参加することで交流が増え、縦の繋がりも強くなり、先輩後輩の間でも、とても仲が良いゼミです。

松田ゼミに入室して、勉学の力がとてもついたと思います。しかし、それだけではなく、礼儀や、縦・横の繋がりの重要性、相互理解と社会マナーなど、社会に出る上で必要であろうことも沢山学ぶことが出来ました。勿論就職活動でも、ゼミでの経験を十分に活かせました。大学三年間を松田ゼミで過ごせて、私はとても成長出来たと思います。

「夏合宿の様子」

「ソフトボール大会」

経済学部同窓会長賞を9名が受賞

平成２３年３月２５日に行われた平成２３年度卒業式において、在学中勉学に励み、人物にも優れた下記の経済学部の学生９名に経済学部同窓会長賞として賞状と記念品（万年筆）が授与されました。

経済学科：小川慶太郎、進藤一樹、橋本裕也
商学科：寺尾絵美、上杉志保、島田泰行
現代応用経済学科：阿地俊寛、萩原翔太、恩田明奈

経済学科・小川慶太郎さん

商学科・寺尾絵美さん

商学科・上杉志保さん

古庄正先生の御逝去を悼む

経済学部1970年（昭和45）卒業　柚　木　　駿　一

駒澤大学名誉教授古庄正先生が去る６月１８日に逝去されました。享年７８歳でした。

古庄先生が経済学部の発展に研究者・教育者としてご尽力されたことは勿論のこと、大学人として駒澤大学の民主化の歩みの中に大きな足跡を残されたことは衆人の認めるところでありましょう。

この正月にもご自宅で研究の進展について語られておられ、ここで終えることにご本人が最も残念に思ったことでしょう。多くの人がその成果に期待しておりましただけに誠に残念でなりません。

私が先生の下で「近代日本経済史」を学び始めたのは、『あゝ野麦峠』に深い感銘を受け、調査で赤城颪の寒風の中、栃木県足利市に同行した１９６８年ことです。本学大学院修了後研究職に付くことはありませんでしたが、後に１９８１年に埼玉県『狭山市史』編纂事業に加えて頂くなど４５年に及んでお世話になり、多くのことを学ばせて頂きました。

先生、本当にありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

（注）古庄正先生は昭和８年生まれ、早稲田大学大学院修了後、昭和３８年経済学部専任講師となり平成１０年まで３５年間、日本経済史の研究と教育に尽力され、経済学部長も努められました。著書に『足利織物史』（共著）、『繊維』（共著）、『強制連行の企業責任』（編著）、『朝鮮人戦時労働動員』（共著）等があります。（事務局）

事務局からの御礼

同窓会の財政再建にむけて、「こまざわ経済通信」第２８号（平成２４年３月３日）で会費納入と寄付金をお願いしましたところ、会費納入者が増加しただけでなく、多数の会員より寄付金が寄せられました。さらに同窓会への温かい激励のメッセージをいただきました。（その一部を下記に掲載しました）ご支援とご協力を心より御礼申し上げます。皆さまの熱い母校愛に感激し、役員一同、同窓会の再建に向けて力を尽くす所存でございます。今後も変わらぬご支援を心よりお願い申し上げます。

【皆さまから寄せられたメッセージの一部です】

御会の御隆盛をお祈り申し上げます。（昭和５０年卒、Ｋ・Ｈ様）、「経済通信」が来る度に学生時代が思い出されます。元気に働いています。（昭和６０年卒、Ｍ・Ｍ様）、経済学部同窓会事務局の努力に感謝します。（昭和４１年卒、Ｋ・Ｋ様）、母校の御発展を陰ながら協力させていただきます。昭和４１年４月から東北福祉大学に勤務しております。（昭和４１年卒Ｓ・Ｔ様）、母校の便りを楽しみにしています。経済学部同窓会の発展を祈ります。（昭和４６年卒、Ｔ・Ｙ様）、会の発展を祈念します。（平成８年卒Ｓ・Ｔ様）、九州より経済学部の発展を祈っています。（昭和４６年卒Ｍ・Ｋ様）

経済学部同窓会事務局からのお知らせ

１．会員の増加にご協力を

同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に加入していない方がおられましたら入会をお勧めください。入会手続きは氏名、卒業年度、卒業学科、住所、電話番号を記入のうえ、下記の郵便口座に同窓会費を納入することで完了します。

◎会費：年２，０００円

◎郵便振替口座

加入者名：　駒澤大学経済学部同窓会

口座番号：　００１９０－１－６１４８０９

２．「こまざわ経済通信」の原稿募集

同窓会報の充実をはかるため卒業生の原稿を募集しております。積極的なご投稿をお願い致します。

・論題：自由

・字数：８００字以内

・送付先：駒澤大学経済学部同窓会事務局

＊なお、原稿の採否は編集委員会にご一任ください。

３．ホームページについて

「駒澤大学経済学部」のホームページ（http:www.komazawa-u.ac.jp/gakubu/keizai/）から「経済学部同窓会」のページを見ることができます。

経済学部同窓会事務局　〒１５４－８５２５　東京都世田谷区駒沢１－２３－１